20231127　「３．５％の希望！」人新世の「資本論」！

前回は、「ＳＤＧｓは、『大衆のアヘン』である！」といって、形だけの取組に対して強く警告を発した経済思想家　斎藤幸平さんの「人新世の『資本論』」をご紹介しました。今回もその著作から、これからの私たちの生活、行動、そして学校での子どもたちの学びがどうあるべきか考えてみたいと思います。

齋藤さんは、著作の中で資本主義が引き起こしている問題を、資本主義を温存したままで解決することなどできないとし、気候変動の原因である資本主義そのものを徹底的に批判しています。しかし、私たちの生活は資本主義にどっぷり浸かってしまっています。資本主義というシステムそのものを転換するというのはあまりに大きな問題で、途方に暮れてしまいます。筆者はその点にも理解を寄せて、この著作の最後にこんな言葉を語っています。

「しかし、ここに『３．５％』という数字がある。なんの数字か分かるだろうか。ハーバード大学の政治学者エリカ・チェノウェスらの研究によると、「３．５％」の人々が非暴力的な方法で、本気で立ち上がると、社会が大きく変わるというのである。」

とし、世界で起こった様々な変革やそのきっかけを作った市民行動を紹介します。そして、

「資本主義と気候変動の問題に本気で関心をもち、熱心なコミットメントをしてくれる人を３．５％集めるのは、なんだかできそうな気がしてこないだろうか。」

と、身近なところから意識変革と連携の輪を広げることを訴えます。

そして、有機農法でも、環境ＮＧＯでも、市民電力でも何でも、できる

こと、すぐやれることはいくらでもあるとし、「一人一人の参加が、３．５％にとっては決定的に重要なのだから。」と、問題の大きさを「何もしない言い訳」にしてはいけないと強調します。そして、本著を以下の言葉で締めくくっています。

「人々が力を合わせて連帯し、資本の専横から、この地球という唯一の故郷を守ることができたなら、そのときには、肯定的にその新しい時代を「人新生」と呼べるようになるだろう。・・・もちろん、その未来は、本書を読んだあなたが、３．５％の一人として加わる決断をするかどうかにかかっている。」

筆者は、経済学という視点で環境破壊の元凶を分析し、その巨大なシステムとそれを支える一部の富裕層などへの批判と、危機に対する対応策を提案しました。今回、この著作をご紹介しましたが、どのような政治、経済体制をとってもそれを活用し応用するのは、一人一人の人間自身です。その意味で、一人一人に豊かな人間性を養っていく教育こそが、根本のカギを握っていると私は考えます。前回も述べましたが、

「何かの犠牲の上に築かれる豊かさを私たちは持続可能とは呼ばない」

「他人の不幸の上に、自己の幸福を築くことはしない」

ということを、環境破壊、人権侵害、戦争や紛争という今まさに現在進行形の事実の上に、子どもと教師がともに考え追求する学びをすすめていきたいと思います。